
流星祈願会

みちる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星祈願会

【Nコード】

N4538R

【作者名】

みちる

【あらすじ】

疲れるとたまには幻想を信じたくなりますよね

神様、おみくじ、迷信、そして流れ星

叶わないと分かっているけど信じてしまう。それらは不思議な魅力を持っているから

疲れたら空をみあげてくださいな。晴れていれば良い空が見えますよ

プロローグ（前書き）

これはまだ書きかけの文です
血などの表現が出てくるかもしれません

そこら辺ご了承ください

プロローグ

魔法使い霧雨魔理沙の帰りは今日も遅かった

「やっぱ夜はさみーな」

夜遅くだが星が出ており明るい夜

魔理沙はいつもの通りに帰路に就いている

……飛びながら彼女はふと空を眺めたくなった

「今日は星が綺麗だな。良い事あるかもしれないぜ」

彼女がそう呟いた瞬間一筋の軌跡が目に入った

「何だ…只の流れ星か」

すぐにその光は消えて無くなる…

そう思っているとその光の数は次第に増えていった

「流星群だ！な、何願えば良いんだ？」

しかし考えてる間にも時間は過ぎていく

焦って考えると尚更思いつかないというのは誰でも変わらないようだ

「な、ど、どうしよう」

魔理沙が考えつかない内に流星群の光は消えてしまった

「あー：消えちまったか。これならすごい魔法が使いたいとか願う
んだったな」

そしてそれらが消えた時に願いが思いつく
所詮そんなものだろう

魔理沙がそうばやき真っすぐ帰路に着いた
その時流れた最後の流星にも気づかず……

――――

ゴトツ

この何かが落ちる音で魔理沙は目を覚ました

散らかつてるようでも絶対に山は崩れなく物の場所も分かる。これ
が誰にも自慢できない彼女の自慢であった

「んな：おかしいな、物が落ちるなんて」

魔理沙は寝ぼけ眼で落ちた物を探す

「何だこれ」

そこに落ちていた物は魔理沙が一度も見たことの無いグリモワール
だった

彼女はそれを拾い上げペラペラとめくる
そこには不思議な魅力を持つ魔法が沢山書いてあった

「…たまにはパチュリーの所に持って行ってやるか、渡さないけどな」

魔理沙はそう呟くとグリモワールを閉じてテーブルの上に置いた

—————エ

どこからか声が聞こえる

魔理沙はその声の源を探し続けるがどこにも見当たらない

「なんだ、誰か居るのか？」

もちろんその問いに答える者はこの部屋には居なかった

「…気のせいだよな」

プロローグ（後書き）

コメントいただけると作者がヒャーハーします
閲覧数が増えるだけでもヒャッハーします
お気に入りとかされるともう死にかけます

このキャラ出してほしい！という感じでも出せたら出します…かな

1話：事の始まり（前書き）

相変わらずのグダグダ展開ですよー
しかも物語が読めますよー

そんなんでも良い方だけどうぞ

1話：事の始まり

一方こちらは雨が降っている紅魔館のとある一室
そこにはパチュリーとレミリア、そして咲夜の姿があった

「……という訳なのよ」

「へー。で、続きは？」

コンコン

ドアを叩く音が部屋に響いた

「どうぞ」

レミリアがそう言うのと妖精メイドが部屋に入ってきて、こう告げた

「失礼します。パチュリー様、魔理沙様が今から図書館へ来訪されるそうです」

「なっ、こんな所でレミィと話してる場合じゃ無いわね…」

「パチエ、続きは？ 続きは？」

「…黙ってるニート吸血鬼。私には魔理沙とキャツキャウフフする使命があるのよ」

……パチュリーがドス黒い声でそう答えると部屋を出ていった

そして暴言を吐かれたレミリアはと言うと

「咲夜…パチエにイジメられた…」

涙目というか泣いていた

カリスマの欠片も無いな。この吸血鬼

「私は雨が止んだので洗濯物干してきますね、お嬢様」

メイドはと言うとさっきまで大雨が降っていたのが止んだので主人の事よりも洗濯物が重要なのでした

――――

妖精メイド達に通され魔理沙は図書館へ足を運んでいた

そして入り口の大扉を開けそこに居た人物の名を呼ぶ

「よおパチュリー、久しぶりに客として歓迎されたな。私は」

そう魔理沙が言うとその声に返すようにパチュリーは皮肉を言う

「別に窓破って来たりしなければいつでも歓迎はするわよ…今小悪魔に紅茶を煎れさせるわ」

「それよりこいつを見てくれ、どう思う？」

魔理沙がああグリモワールを出した瞬間パチュリーの空気が変わった

「すごい魔力…このグリモワールはどこにあったのかしら？ちょっと貸してみて」

「私の家に在ったぜ、しかしさっきよりこの本軽いな…」

魔理沙はそう言ったがその本はパチュリーには持てない程重かったしかも読めない

「魔理沙、あなたこれ読めるの？」

「ああ、読めるぜ」

——これはおかしい

パチュリーはそう思った。

魔理沙には軽くそれ以外の人には持てない

魔理沙には読めてそれ以外には読めない

「：今日一日貸してくれるかしら」

「良いぜ、また明日取りに来る」

そう言う魔理沙は冷めた紅茶を飲み干し大図書館を後にしようとした

「魔理沙、一個聞いていいかしら」

それをパチュリーが引き止め、質問をした

「あなたは最近雨を見た？」

「いや、見てないぜ」

——

夕方辺りに帰ってきた魔理沙は久しぶりに外で雨が降っているのを見た

「今日は疲れたな：それにしても私には読めて他人には読めないグリモワールか：面白いな、良くわからんが」

呑気にそう呟くと魔理沙は疲れていたのかすぐに眠りに就いた

――――

魔理沙は夢を見ていた

誰だかわからない人に話しかけられる夢だ

「……………を使え」

「うーん…誰だ？」

魔理沙の問いかけには応えずそいつは言葉を続けた

「お前が望んでいるものだ」

「…なんだそれは」

「そうだな…お前が言うすごい魔法と言う奴だ」

――――そこで夢は途切れた

魔理沙が飛び起きるとそこには霊夢とアリスの姿があった

「大丈夫？うなされてたみたいだけど」

アリスは心配そうに魔理沙の顔を覗き込んでいた

霊夢はといういつもとはすこしばかり違う顔であった

「はあ…はあ…なんなんだ今の夢は」

「何か魔法とかなんとか言ってたわね、とりあえず着替えてきなさい」

そう言う二人は魔理沙が身支度を整えるのを待っていた

「で、何があったんだ？」

「さあ、私は呼ばれただけだからわからないわ」

アリスは首を傾げるとそう答えた
そこにつなげるように霊夢がこう答えた

「その件については私が答えるわ」

「ほう」

「紅魔館が…崩壊したわ」

t o . b e . c o n t i n u e d

1話：事の始まり（後書き）

というわけです、紅魔館壊れました。

それ以外特に何も言うことはありません

強いていうならば

俺の書くレミリアはカリスマの欠片も無いですね。だけW W

2話：違和感（前書き）

登場人物

魔理沙

霊夢

アリス

たまに分かりにくい言われるから今度から書いていこう…

2話：違和感

「紅魔館が崩壊したわ」

「…は？」

「昨日の夜に何か起きたらしくてね…何か知ってる？」

聞いた話によるとレミリアと咲夜は夜に出かけ、美鈴は外に居たので無事だったらしい

「パチュリーは無事なのか？」

「無事っちゃ無事よ。まあ動けないくらいらしいけど」

魔理沙は安堵したようで大きく息を吐きその間に答える

「紅魔館の事だが私は知らないな、これまで寝てたわけだ」

昨日の夜はというと魔理沙は夕方頃から今まで寝ていたのだ、知る由も無い

「…そう、なら良いわ」

そう言うと霊夢は魔理沙の視界から外れそれと入れ替わるようにそこにアリスが入る

「ねえ魔理沙、何か心当たりは無いかしら」

「心当たりねえ…昨日パチュリーの所へグ——」

魔理沙がそう言い掛けいきなり言葉を止める

「パチュリーの所で？」

「あ。ああ、グラビティがどうとかって話をしたな」

「ぐらびてい？」

「何でも物が重くなったり軽くなったりするらしいぞ」

もちろんそんな話を魔理沙はしていない

「へえ、じゃあそれが原因なのかしらね」

「はは…かもな」

そう言いながら魔理沙はアリスを見ていなかった
見ているのは床に転がっている本、そう。パチュリーに預けたはず
のグリモワールである

——何でだ、なんでここにあの本があるんだ

「魔理沙、アリス、出かけるわよ」

「分かったわ、行き先は紅魔館？」

「そうよ、何かあるかもしれないしね」

二人は外に出たが魔理沙が出てこない

「魔理沙？」

「ああ今行く！」

魔理沙はグリモワールを荷物に入れて持ってきた

「こいつからは目を離しちゃいけないぜ…」

——
——
——
——
——

そして集落を超え湖を超え

「魔理沙、あなたすこし飛ぶの早くなったかしら」

「そうか？ 私はいつも通りに飛んでいるだけなんだが」

「ほら、スピードだから喋っていると舌噛むわよ」

三人は紅魔館があった場所に来ていた

「こいつは何も無くなってんなー」

そこには瓦礫すら落ちてなく、紅魔館の欠片も無かった

それを見ている魔理沙の横でアリスが頭を抱えていた

「ほんと…何すればこんなになるのかしらね」

「さあね、私にはさっぱりだわ」

二人はその跡を見ても全く検討がつかないらしい

「……………だよ」

魔理沙は何も感情を持たない目で言った

「魔理沙、今なんて言った？」

「いや、だから……………だって」

霊夢とアリスはその言語を聞いていたがさっぱり分からなかった
そうこうしているうちに魔理沙の目に感情が戻る

「つたく、一体どんなことすればこんなになるんだか」

……どうやら魔理沙は今の事には気づいていなかったらしい

霊夢は魔理沙に聞こえない程度で声でアリスに囁いた

「アリス、絶対に魔理沙から目を離さないでね。」

「ええ、分かったわ」

しかし霊夢の言葉はそれで終わらなかった

「―――場合によっては動かなくして」

「……そのワケは？」

「単純に今の魔理沙は危険よ。自分では気づいていないけど変に魔力が漏れてるの」

そんなことに魔理沙は気づいていないらしくいつも通りにしている
二人が話しをしているのを見て魔理沙が近づいてきた

「二人とも、何話してるんだ？」

「なんでもないわー。それよりも次は妖怪の山へ行くけど？」

霊夢がそう言った

「じゃあ私たちは永遠亭に行ってくるわ」

永遠亭：要はパチュリーの所である

「音に気づいた集落の人が運んでいってくれたらしくて…」

紅魔館を壊した何かの音を聞いて村人が集まったらしい
普段は吸血鬼の館だと言われ恐れられているが人っぽいものが倒れてれば黙っている訳にはいかないだろう

「あ、あとこんなこと言ってたわ。その時間辺りに空を飛んでいたものがあつたって」

偶然その時間に外に居た村人が紅魔館の方へ行く影を見たらしい

「ほう。で、どんなだったんだ？」

「暗くて見えなかったけどすごく早かったらしいわよ」

「だから妖怪の山か…」

「まあ違うと思うけどね、文は情報も持ってるから役に立つでしょ」

そう言うのと霊夢は妖怪の山の方へ飛んでいってしまった

残された魔理沙とアリス

魔理沙は何もしていないのに少し息切れをしていた

「顔色悪いけど大丈夫…？魔理沙」

「大丈夫だよ。さあ行くぞ！」

魔理沙は大声を出してその事を誤魔化すと箒にまたがった
自分の体の具合が悪いことは彼女も気づいている。自分の体の違和感、そして魔力の昂ぶりにも

2話：違和感（後書き）

東方ってメンバーにもよるけど意外に漢字多くなるよね
今回多すぎww

それではみっちゃん先生の次回作にご期待下さい！

3話：―博麗霊夢（前書き）

3話の霊夢編です。

ちよいと短いけど許して
登場人物

霊夢

文

柊

にとり

天狗

3話…―博麗霊夢

「じゃあね二人とも」

あの後妖怪の山の方へと飛んでいた霊夢。

紅魔館が無くなった事は幻想郷にも大事おおごとだったらしく天狗達はとても忙しそうだった

「あ、その天狗、文知らない？」

「文様ですか？文様ならいつでもどうり河童と将棋をしていますよ」

いつもどうり……？あの射命丸文ならこのネタに飛びつかない訳がないだろう

そうこう考えているうちに霊夢は河城にとりの元へ来ていた

「にとりー、文居るー？」

「おお、我が盟友。文ならさつき柊と出ていっちゃったよ」

にとりの話によると文は何か考え事をしていると思ったらいきなり柊を連れて外に出て行ったらしい

「それで、どこに行くかくらい聞いてたの？」

「聞いてたには聞いてたんだけどね…」

何故かにとりは言葉を濁している

「良いから早く言いなさい？」

霊夢はとても良い笑顔でこう言うと退魔札を取り出した

それを見て慌てふためかない妖怪は居ない。

「わっわっ、言うからそれをしまって！」

「ふん、最初からそうすれば良いのよ」

「こんな盟友嫌だよ…」

「ん、何か言った？」

――――

「いやゝなかなか居ませんね、椛」

「そうですね、文さん。あ、千里眼はちゃんと働かせてますよ」

「あたりまえです」

文と椛は空を飛びつつある人物を探していた

「うーん、見つからないですね。文さん」

「捜し物は見つからないから探すんです」

しかしそれから結構な時間が過ぎても探しびとは見つからなかった

「しょうがないですね。じゃあ別のネタでも探しに行きましようか。」

「そうですねゝ。じゃあパチュリーさんの居る永遠亭にでも行きましよう」

一方その頃の霊夢…

「まったく、何で私がこんなめんどくさい事を！」

にとりから話を聞くと文の目的は魔理沙を探し出すことだったらしい

その話を聞き霊夢は永遠亭へと速度を早めていた

そうしていると横から猛スピードで近づく影が一つ

「おや霊夢さん。こんな所でどうかしましたか？」

「私にあんたに用があったのよー」

「それはそれは。」

霊夢は文を引き止め情報を聞こうとしている

「おや霊夢さん…あなたともあろうかたがタダで情報を教えてもらおうと？」

文はにやつと笑いこう言った

その笑みに霊夢も笑いで返し…以下略

文は手であたまをなでつつ手帳を見ていた

「いたた…まずですね、紅魔館が壊れました」

「知ってる」

「紅魔館の主と使用人達は無事、被害は紫魔法使いだけ」

「知ってる」

その後も色々と聞いていたがどれも誰もが知っている話ばかりであった

「いくら天狗といえども情報収集には限界がありますよ」

「こういう時に役にたたないわねえ…あんたらは。もう良いわ」

そういうと霊夢は文を放置して魔理沙達が居るであろう永遠亭の方へ飛んでいった

「ひどいですねえ、人をこんなにしといて。ですが…ネタの匂いがしますね」

文はこっそりと霊夢の後をつけていくことにした

「これで明日の一面はいただきますね！」

3話：―博麗霊夢（後書き）

次は同じ時間帯の魔理沙編です。

何が起きますかね。自分でも分かりませんww

4話：―霧雨魔理沙（前書き）

謎展開キタコレ

深夜テンションは変なのかけるなWW

もう何も期待しないでくれ、話の展開に
登場人物

魔理沙

アリス

チルノ

大妖精

4話…霧雨魔理沙

「魔理沙、大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だから早く行くぞ」

あの後彼女らは紅魔館跡を後にし湖の上を飛んでいた

「やっぱねーあたいは雨より晴れが良いかな！」

「あ、チルノちゃん、誰か来たよ」

湖の辺りにはいつもどうりチルノと大妖精が居た

二人は魔理沙達の姿を見るとこちらに向かって飛んできた

「こんにちは、二人とも」

「はい、はじめまして」

アリスと大妖精は互いにのほほんと自己紹介などをしていた
その横で

「魔理沙、弾幕しよう！負けたら今日一日付き合ってね！」

「悪いな、急いでるんだ」

「そんなことはどうでも良いからしようよ！」

魔理沙はその誘いを断ろうとしていたがチルノはそれに納得しなかった

「アリス、急ぐぞ」

「えー、やっていけよう」

そのしつこい誘いに魔理沙は声を低くして言った

「どうしてもやるってなら…手加減は出来ないぞ」

だがチルノはその変化に気づくこともなく喜んでいる

「良いの？魔理沙」

「なあに、すぐに終わらせるさ」

そう言われるとアリスは大妖精と共に少しばかり下がりそれを傍観することにした

魔理沙は大丈夫だと言ったが顔色は良くはない。実際に弾幕でチルノに負けている

「魔理沙…今日は私が勝つんじゃない？」

「はっ、そんなワケないだろ？」

余裕な口を叩きつつも魔理沙は内心焦っていた

『私を…使え』

魔理沙は前から声が本から出ていることに気づいていた。ただそれに気づかないフリをしていただけ
しかし今は考えてる暇は無い！

「…しょうがねえ！」

魔理沙はあのグリモワールを取り出しバラツとめくりそこに書いてある魔法を唱えた

その一連の動作にアリスは嫌な予感を感じとっさに反応をしていた

「っ、結界！」

——爆音と閃光

それらで水しぶきが起き湖の水が大分なくなっていた
そして水しぶきが収まりアリスと大妖精は目を開ける…

そこにはグリモワールを抱えたまま動かない魔理沙、そして水の無い湖に落ちてゆくチルノの姿がみえた

「——っチルノちゃん！」

すぐに大妖精はチルノの元へ飛んでいく
そしてそのまま動かない魔理沙にアリスは問いかけた

「…魔理沙、今何をしたの？」

「何ってチルノと決着をつけたただけだが？」

「…だけ？ おかしいわよ魔理沙！」

魔理沙のその淡白な態度にアリスは激昂する
だが魔理沙の姿勢は変わらなかった

「そんなことより早くパチュリーの所に行こうぜ」

そのまま二人は飛び去り森を飛んでいた
しかしそのまま進むのではなくアリスはおもむろに地面へ降り魔理沙を呼んだ

「——魔理沙、あんたをこのまま行かせるわけにいかないわ」
「ほう、じゃあどうするんだ？ 止めるか？」

「そうさせてもらうわ…力づくでね！」

そして再び勝負が始まった

「本気でいくわよ！出てきなさい、ゴリアテ人形！」

そう言って投げたアリスの人形は地面に落ちるとみるみる間に大きくなっていった

「魔理沙を止めなさい！」

しかし人形は動かなかった

「っ…なんで動かないの！」

「その人形の主導権は今は私にある」

そしてそのままゴリアテに斬られるアリス

あの巨体に斬りかからればもう動くことすらままならない

アリスを置いてそのまま去ろうとした魔理沙にアリスは呟いた

「魔理沙…あんたは狂ってるわ」

その言葉に魔理沙は止まりこう返した

「知ってるよ」

…只そう一言

4話：―霧雨魔理沙（後書き）

という感じでした。

魔理沙好きな人、ごめん

あとゴリアテは天則とかかな。

そしてこの謎展開に感想くれる人居たら酷評してほしい。

これ面白いつて言ったら相当アレだぞ：うん

あと感想くれるとうpペース下がないよ！ww

そしてこの長編のオチ考えてくれる人募集中。俺が考えるとおかしなことになるし

いっそ引き継いでくれ：

5話：承（前書き）

苺みるくさんからのアドバイス（というかほぼ原文）でめっさ早く
5話完成！

あー他人のマトモな考えのほうが落ち着く。自分だけだとマンネリ
だぜ

登場人物

アリス

大妖精

永琳

パチュリー

紫

5話：承

「あんたは…狂ってるわ」

「知ってるよ。」

そう言うとき魔理沙はゴリアテ人形を元の大きさに戻し飛び去った
そしてそのまま置いて行かれたアリス

「…どうしようかしら、動けないし」

等とぼやいてると近辺で彼女を呼ぶ声が聞こえた

「魔理沙さーん！アリスさーん！」

「上海、行ってきた」

「シャンハイ！」

そしてちょっと経つと上海人形は大妖精を連れてきていた

「助かったわ。大妖精さん」

「大ちゃんが良いですよ。すごく大きな人形が見えたので来てみた
ら…」

という経緯でここまで来たらしい
しかしチルノの姿は見えない

「ところでチルノの具合はもう良いの？」

「チルノちゃんは妖精ですし…なによりバカですから、大丈夫です
よ」

この大妖精、意外に毒舌だったりする

「さて、本題に入るわ、今から言うことを霊夢に伝えて頂戴」

アリスはあることを大妖精に伝え、そのまま永遠亭へ行けば良いこ
とを伝えた

「分かりました…じゃあ行ってきます」

「頼んだわよ…大ちゃん」

アリスは少し顔を赤らめそう呼んだ

「はいっ！」

— — — — —

時は同じく永遠亭

そこにはベッドで座っている少女が居た
パチュリー・ノーレッジである

「体の具合はどう？」

そう言いながら入ってきたのは白衣の下に赤と青のドレスを着た医者——八意永琳であった

「つと…ここに薬置いておくからちゃんと飲みなさいよ」

そういうと彼女はパチュリーの横にある机の上に水差しと薬をおいて出て行った

「はあ…」

「随分とお困りのようね」

ふとパチュリーが着いたため息に反応するように女性の声が部屋に響く

——部屋を見渡すとついさっきまで何もなかった場所に女性が居た

「…紫」

「ご名答」

「もっとマシな登場の仕方は出来ないのかしらね」

「これが普通なのよ」

ひと通りふざけ終わり紫の顔が真面目な顔へと変わった

「それで、あなたは館が壊れた原因を少しは知っているんでしょう？」

「あの原因が魔力だとは知っているようね…良いわ」

— — — — —

昨日、魔理沙が図書館に来た。

それもあるグリモワールを持って。

そのグリモワールは私ですら見たこともなかった。そして、不思議な事で…

「この本重くて持てないわよ…」

「そうか？結構軽いと思うが。運動不足じゃないのか？」

魔理沙が持つとその本は軽くなる。

私が…強いていえば、魔理沙以外の人物が持つと、尋常な程重くなる…？

更にありえないのが、中身だったわ。

魔理沙は中身の文字が全て…かどうかは判明してないけれど、まあ、一応読めるらしいわ。

でも多種の文字を読んでいる私には読めなかったわ。

それらを纏めると『魔理沙専用』のグリモワール…なのよ
もしかしたらその本には他の本とは違う何か”意思”を持っている
とするなら…

そう思って、私は一晩その本を預かることにした。

…そして、爆発前の時刻、私はグリモワールをとことん調べたわ。
他のグリモワールと比べながら、ね。

驚いたこと。このグリモワールは、他のと比べ異常な程の魔力を宿
している。

更に想定した通り、その本には自立心があって、放って置くと、急
にふよふよと動き出した

それで図書館に張った結界に魔力を封じ込めなくなったグリモワ
ールが爆発的な魔力を図書館全体に流出した。

あの図書館よ、何かが誘爆するに決まってるわ

もう、その後はわからない。

ただ、見舞いにきた小悪魔に聞いたのだけれど、あの本は”なくな
っていた”ようね。

予想はついているわ。所有者…つまり魔理沙の元に戻っていったの
ね。

「――というのが私の見解よ」

「へえ。それだけ聞ければ充分よ」

そう言うと紫は手を振りスキマの中へと消えてしまった

その帰りを一瞬だが見送りパチュリーは処方された薬を飲みしばしの睡眠をとった

――
――
――
――
――

一方その頃のアリスはというと

「……動けないしどうしようかしら。寒いし」

未だに森で横たわっていました

5話：承（後書き）

ちよつと余裕出てくるとネタも入る…

楽しかったです。今回

またシナリオ原文お待ちしておりますね↑オイ

6話：選択肢（前書き）

相変わらず原文もらっちゃったので早いです

人の文を見てそれをその人の面影を残しつつ自分好みに修正する。
楽しいです。

登場人物

魔理沙

霊夢

パチュリー

鈴仙

永琳

大妖精

6話：選択肢

迷いの竹林。

そこには十何メートルもあるような竹がまるで壁のようにと聳え立つ場所――

そんな場所で、一つの影が風のように、どこかへと向かっている。その後ろからは、また一つの影。

更に、その後ろから二つの影だろうか。

しかし、一つ目の影と、二つ目の影の距離はかなり離れているが、二つ目の影と三つ目の影の間距離は縮まっていくな。

「…追われてるな」

一つ目の影…霧雨魔理沙。

後ろから2，3人くらいだろうか。

視線を感じ、更に気配も増していく。

「…。」

早めに飛ばさなければ追いつかれる…魔理沙はそう感じたのか、速度を増す。

「見えてきたっ！」

その視線の先には永遠亭がある。

永遠亭の入り口に立った時、ふと声が聞こえた。

「…我ヲ使エ…」

——ああ、この声だ。というか我を使えってどういうことだよ…

魔理沙も気付いてはいた。自分の異質な状態にも。

ただ、気付いてはいるものの、その”意識”をコントロールできない。自分でもその状態が抑えきれない…そんな状態をただ、堪えるのが精一杯な状態だった。

「今は使う所じゃねえっての…邪魔するぜ」

ガラッ。

魔理沙は戸を開けた。

その音に気づいたのか奥からうさぎの耳をつけた長い髪の少女、鈴仙・優曇華院・イナバがやってきた。

「どうしたの、あの紫魔女の見舞い？」

「まあ、そうともいえるしそうじゃないともいえん」

つまり、見舞いでもあるという事だ。

「はあ、一々遠まわしに言うのね。まあいいわ、部屋は向こうを右に曲がったところだからね」

「さんきゅ」

魔理沙は鈴仙と適当に会話を交わすと奥へと進んでいった。

カラララ：

戸を開ける静かで乾いた音がパチュリーの部屋に響く

「パチュリー大丈夫かー」

「…魔理沙。来てくれたのね」

パチュリーは案外無事そうで本を読んでいた

「魔理沙、邪魔が入らないうちにあなたに言うことがあるわ」

「何だ」

「紫にも誰にも言っていないこと…」

魔理沙はそれを聞いたためにパチュリーの元へ近づいていった
そしてベッドへあと一步の所まで近寄った…その時

「っ!?!」

そうすると何か、壁のようなものに魔理沙は弾かれる
その衝撃で彼女は尻餅をついた

「…!? 魔理沙、どうしたのよ」

「パ、パチュリー、何か今魔法、使ったか？」

「いえ…使っていないわよ」

確かにパチュリーは何も仕掛けていなかった。
部屋に結界などを張る必要もないし、警戒しているわけでもなく、
それに魔法を使う程の体力を携えていない。

「どうやら間に合ったようね」

先程あけた戸から、紅白の巫女：要は博麗霊夢と大妖精が入ってきた。

御祓い棒を構え、今にも攻撃をするのではないか：

「お、おい霊夢、何身構えてるんだ」

「話は大妖精から聞いたわ。今の貴方は危険な状態なの、安静にしてもらおうわ！」

そう言うのと霊夢は破魔の札を袖から出していた

「そんな事…」

——— どのいつもこいつも危険危険って五月蠅いな…っ！

『我ヲ…使エ』

またも脳内にあの声が響く

「くそっ、また使えってか…」

しかし使う訳には…！

感情で、心で脳裏で、必死に抵抗する。

今、またこのグリモワールの力を解放すれば…

永遠亭が崩壊する

そんな言葉が頭の中に思い浮かんだ

流石にもう身を、力に委ねる訳には…。

「はっ！」

窓を突き破り、外に出た。

その後を霊夢が追う。

「逃げる気!？」

「……。」

霊夢はふと気付いた。

魔理沙から流れる圧倒的な魔力と紅魔館に着いた時のような魔理沙の感情を持たない瞳に。

——魔力が竹林に激流のように流れてる

激流に身を任せるとか何とか聞いたことはあるが、流石にこの激流に身を任せたくない。

しかし、そんな洒落にもならない事を考えていては流れが変わってしまう。

…要は完全に、相手の思うままになってしまう。

「うう…あ…」

かすかに聞こえる唸り声。

その声を聞き取った霊夢は少しの冷静さを取り戻し、考え直す

——もし、魔理沙が自らの異変に気付いているとしたら、もしか

したらこの異質をコントロールしようとしてる…？

ありえなくはない。

——力を使うことに抵抗している？

いや、彼女は力を欲するタイプだ、それはない。

——永遠亭崩壊を抵抗？

少しはありえるけれど、もう少し具体的な…

その思考を途切れさせるような魔力の反応に霊夢は気付く。

「っ…」

今までに感じたことのない魔力…。
もう、彼女の面影のない魔力。

魔理沙自体はもう…——

頭を振って、思考を飛ばす。

今は…戦いに集中しないと、身が危ない。

「あのグリモワールを身から離せば…っ」

元に戻るのでは？

「無理よ」

窓から声が聞こえる。
パチュリーの声だ。

「そのグリモワールは…まあ私の見解だけど”魔理沙専用”のグリモワールで、そのグリモワールは変わった意思を持ってるの。その意思是、所有者から離れないという、忠誠心みたいなもので、身から離してもグリモワール自身が魔理沙の元に戻ってくる。本だけれどここにやってもダメって事よ」

「じゃあどうすれば…」

「そうね…、あなた人間に対しての”封印”って出来るの？」

その場の時間が凍りついたように、霊夢は動くことが出来なかった。数時間とを感じる…そう思えるだけで実際には刹那の時——それが過ぎ霊夢は思考を取り戻した

「魔理沙を…封印？」

これは決断すべき事だった
一人を救い他を無くすか一人を犠牲に他を救うか———友を封印するべきか、しないべきか。

6話：選択肢（後書き）

文どこ行ったし。今度書かなければ
霊夢さんはどうするんでしょうかね

それともつと宣伝してくれてもいいのだが？
WW
感想もお待ちしております

7話：可能性（前書き）

今回は半分くらい書いてもらいました：

そしてなげえよ。これまでもこれからもないであろう長さである

あと文中に書いてあることをするとシユールさが増します。おすすめ

登場人物

霊夢

紫

パチュリー

てゐ

レミリア

咲夜

永琳

7話：可能性

「貴方、人間の封印は出来ないの？」

「それは…」

人間の封印、それは下手をすれば死に至る。

上手くいったとしてもあの大魔術師、聖白蓮のように幾年も眠ることとなり、目覚めた時には人間では無くなっているかもしれない。もしかしたら記憶も失っているかもしれない。彼女は幻想郷の者が知る彼女ではなくなるかもしれない…

——どちらにせよにしろ封印という選択肢は酷なものだ

それを霊夢は知っている。勿論パチュリーも——

「…これは面白い事を聞いてしまいましたよ？」

「「！？」」

その会話を盗み聞きする影が一つ…

物陰に隠れていたであろう文がひよこっ顔を出す。それも手帳を持って。

勿論、霊夢の後ろを着いてきたのだ

「文!! あんた…っ!!」

「これはいいネタですよ! 号外にでもしましょうかね?」

それだけいって文は飛び立った

「今なら…原因は魔理沙だと気付かれずに事を終えられそうだったのに…」

不安を隠しきれない霊夢の腕は拳を握りしめたまま震えている
その拳には怒りも籠っているが。

「なんでいざって時に失敗するのよ私は!」

そのまま霊夢は不安と自責の念により崩れ落ちそうになってしまった

…が、その不安は意外にもあっさりと消える

「ちょ、何をするんですか!？」

「あんたにはちよつとやってもらいたい仕事があつてね」

唐突に文が捕らえられた。

更に意外な事で、その文を捕らえたのは

「さあて、こないだの紅白巫女さん、魔理沙を早く助けてあげな」

「そうよ、折角天狗を捕まえてあげたからね」

「それより咲夜、この前の嘘ネタの方少し天狗にお返しをするわよ」

「霊夢さんやパチュリー様の邪魔をさせませんよ!」

4人の影

一つはこの竹林の因幡のリーダー、因幡てゐ。

次に、紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。

更に、紅魔館の主、レミリア・スカーレット。

最後に、大図書館の司書、小悪魔。

その4人が文を捕らえていた。

「…!？」

「……ちよつと霊夢、こっちも集中しなさいよ…っ!」

霊夢が後ろを見ると、パチュリーができる限りの小さな結界で魔理沙を抑えていた。

そこへ小悪魔とてゐるが近づき、パチュリーを支える。

「あ、ありがと…」

「パチュリー様、後は私にお任せください!」

パチュリーと変わって、小悪魔が結界を保つ。
その間の選択肢だった。

「ゴホッ、ゴホッ…霊夢、どうする…封印、するの?」

咳交じりの言葉。

しかし、それは霊夢に痛い程伝わっていた。

「…それは」

そう考える霊夢の元へいつの間にか結界を解いていた魔理沙が襲いかかってきた

あまりにその動きは早く反応が遅れる

「おおーっと、眠り粉くらいな！」

しかしてゐるが青紫の粉を魔理沙に吹きかける。

それは強力なもので、一瞬にして魔理沙が崩れ落ちた
おそらく永琳が作った薬であろう。

「…ゆっくり話、しようよ」

「てゐ…」

いつもとは違う感じのてゐるが部屋に導く。

少し怪しいとも思うが今はそんな状況ではなかった。

「それよりてゐさん、いつもとは違って優しいですね」

その霊夢の疑問を口に出すように、小悪魔がてゐに質問する。

てゐはにやつ、と笑つて言つた

「これは本心だよ。いつもは遊び心。」

「…そ、そうですか」

そんな疑問は一言で終わったが。

「…で、てゐ、あんた何かしってるの？」

「うーん、ちよろつとかな？」

「話聞かせてくれる？」

「もっ
ちろん。」

何かと自信満々のてゐる。

パチユリーのベッドの近くに全員が集まる。

寝ているパチュリー、霊夢、てゐ、小悪魔、咲夜、レミリア、永琳。

ちなみに、文は咲夜とレミリアの手によって、別室で入院中だとか

てゐは黙々と語り始めた。

「で、魔理沙は流れ星に願い事をしたらその本が落ちてきた…って
いってたよ」

「流れ星が？」

「祈願？ うん、お願い事だから祈願だね」

「魔理沙は毎年あの店主と流星祈願会ってのをやってるみたいだね。
それが影響で星の魔法を使うようになった——とか店主はいった
な」

境界…スキマから八雲紫が出てきた。

「ええ、完全にあのグリモワールは危険よ。その所有者はもっと、
ね。」

「やっぱり封印するしかないとおもうわ、霊夢」

「でもあの子の未来よ！？ 私達が手なんか出すことは…っ！」

「…どっちにしろ、幻想郷は確実に崩壊に進んでいるわ。結界はも
って1ヶ月——魔理沙やグリモワールから流出している魔力を防
ぎきれない。博麗大結界はもう限界に近いのよ」

それに他の人物も同意をした

「私達の未来より、白黒の未来が大事だということの？」

「っ…それは！」

霊夢は今までを思い出す。

初めて出会った時の、魅魔の手下だったことを。

神社に穴が開いて、勝ち抜いていかなければいけなかったことを。
変に魔力が流れていた時のことを。

異世界からきたメイドと一緒に倒したことを。

紅色の霧が幻想郷を覆ったことを。

春なのに冬が長続きする異変。

永く続く夜で敵として対面したこと。

花が咲き乱れた異変。

更に百鬼夜行。

山の神様の君臨。

神社の穴からの怨霊、核融合。

天候がコロコロ変わる異変。

空の宝船は魔界につづく船だったこと。

大きな影が幻想郷に目立っていたこと。

神霊が沸いて、それを3人で立ち向かったこと…

その異変や事柄にはいつも近くに誰がいた…？

霊夢はその事に気づきあることを決心した

「幻想郷は救うわ。でも…魔理沙も救うわよ！」

その返事を聞くと紫は少しばかり満足そうに微笑んだ

「…ふふ、それでこそ天下の博麗霊夢よ」

【以下『亡き王女の為のセプテット』を流してゆつくり御覧ください
い】

その霊夢の表情を見てレミリアの心境も変わったようだ

「そうよ、あの白黒が居なくなったらフ란の遊び相手が居なくなるもの…」

主の溢れるカリスマに呼応するように咲夜もそれに同意した

「フ란お嬢様だけでなくパチュリー様も寂しがりますものね」

「私も何か方法は無いか探してみるわ」

そう言うのとレミリアは窓を開け

「行くわよ、咲夜。」

飛び立った

「お嬢様。外は晴れですっ！」

日傘も持たずに

「えっ」

そのままレミリアは灰となり飛んでいった…色んな意味で

「お嬢様あああっ！」

「私は一旦図書館に戻るわ」

「…今のスルーでいいのかしら？」

パチュリーはベッドから立ち上がろうと準備をしていた
しかしその事は永遠亭の医者が許さなかった

「患者はベットで寝てなさい。絶対安静よ」

「私は一応魔法使いよ。そうそう死なないわ」

パチュリーは鋭い眼光で永琳を睨みつける

「ふう…分かったわ、行きなさい」

その力に負けたのか永琳は彼女に外出の許可を出し部屋を出て行った

「…恩に着るわ」

紅魔館の人物達ははそう言うときスキマに飲み込まれて行く

彼女らが部屋を出てそこには紫と霊夢だけになった
そこで霊夢は”ある提案”を紫にもちかける――

7話：可能性（後書き）

※レミリアさんはもう出てきません

8話：異変の末（前書き）

他人からもらわずに久々に更新。
ちよっち短めだけど許せ。

そろそろ終わりたいかな…。

8話：異変の末

パチュリーの病室だった場所に今は霊夢と紫の二人しか居ない
そこで霊夢はある提案を紫にしている

「だけど霊夢、あの子は…」

「わかってる…だからこそその考えよ」

――――

場所は違く紅魔館跡地…の近くの村

そこに紅魔館の四人は居た

「あの後無理言って出来るだけ本を集めといたんですよ」

「でかしたわ、小悪魔」

そして空き家に埋まっている大量の本を見上げパチュリーは叫ぶ

「搜索：開始っ！目標は強い封印。または解呪の本！」

「了解しました！」

そして作業を進める四人と妖精メイド達

ある程度時間が過ぎある事に気付いた妖精メイドが咲夜に聞いた

「あれ…そういえばお嬢様は？」

咲夜は一応真実は言わない事に決めていた（真実がカリスマ皆無の
為）

「えーと、じ、実家に帰ったわ」

「実家壊れましたけど」

「じ、じゃあ…」

「じゃあって何ですか、じゃあって」

「えーと…」

そんな光景をまったりと見ている美鈴とパチュリー

（やっぱ咲夜さんは受けですね）

（それには同意するわ）

———お前ら働けよ

そう妖精メイド達が思った時ぐらりと地面が揺れた地震？いや、その揺れは恐らく結界の問題であろう

「なっ、もう結界が保たないの！？」

「しょうがない…そこまで行きますか」

その言葉に頷き飛ぶ方向を顎でパチュリーは促す

目的地へ飛び向かいながら咲夜が疑問を言う

「一ヶ月…少なくとも一週間は保つんじゃないのですか？」

「破壊の原因…要は魔理沙の”魔力”が段々と増えていくことを考慮して居なかったのよ…」

パチュリーは苦虫を噛み潰したような顔で呟く

「…一番嫌な展開ね、方法が分からなく結界に限界が近い。要は—
」

パチュリーはあえてその言葉を口にはしなかった
誰にでも嫌な方法だ、だがしなければいけない。つい話が止まる
そうこうしているうちに四人は永遠亭へ着いた

しかし中に入った一同を違和感が包む
いや、違和感というよりいつも道理だからこそその違和感か——

（あの魔力が…無い）

行く前まで永遠亭を覆っていた”あの魔力”が無くなっていた
魔理沙が逃げた…いや、それは無い。
それならば答えは一つしか——

長い廊下を走り角を曲がりやっと彼女達が居るであろう場所に着いた
戸を開けるとそこには霊夢と紫が佇んでいる

「お帰りなさい、何か方法は見つかった？…もう遅いけど」
「…紫っ」

その皮肉っぽい口調を霊夢は咎める

「霊夢！魔理沙は！？」

四人を代表しパチュリーは霊夢に魔理沙の行方を聞く

「それは…感じてのとうりよ。」

霊夢は空のベッドを見ながら言っている

「ここに居ない、幻想郷に魔力を感じない。これが答え」

「じゃあもう異変は解決したのね…」

「ええ」

そう言われパチュリーは戸を開け部屋を出て行った

それを他の三人も追いかけて部屋を出る

紫は……いつのまにか消えていた

一人残された霊夢はぽつりと呟く

「…これで良かったのかしらね、魔理沙」

——もちろんその言語に答える者は居ない

8話：異変の末（後書き）

一応まだ続く…

更新はいつになるだろうか。ワカンネ

更新しないかも。続きは勝手にくみたいな。

もし何か原案を貰えば”それも”出します。パラレルワールドみたいな

あー…暗いわ。

多分更新するときはまた別なもの始まると思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4538r/>

流星祈願会

2011年10月7日17時50分発行